

# 国際協力海外レポート

松永 広大（まつなが こうだい）【JICA 青年海外協力隊】

赴任地：ミクロネシア連邦 チューク州ウエノ島  
職種：小学校教諭  
赴任期間：2011年6月～2013年6月（予定）



松永広大（明石市大久保町出身）

ミクロネシア連邦はチューク州ウエノ島へJOCV（青年海外協力隊）小学校教諭として派遣。（派遣期間：2011年6月から2013年6月予定）

聖セシリア小学校にて、低学年を中心に算数の指導を行っている。

（写真は、チューク式の髪型にしたところ、チュークでは男は髪の一部を残して弁髪のようにします。）

明石市のみなさま、ラナニム。（現地言葉で“こんにちは”の意）

ミクロネシア連邦と言われてすぐに分かる人はどのくらいいるでしょうか？

ミクロネシア連邦は四つの州から成り立っています。ナンマドールという海上巨石遺跡があり、首都であるポンペイ州、キリスト教色の強い平和な田舎町のコスラエ州、伝統文化が強いまだに石貨が使われているヤップ州、そして私の派遣されているチューク州です。

四州それぞれが別々の様相を呈しているため、ここでは自分の派遣先であるチューク州のみに焦点をあてて紹介していきたいと思います。



沈船 “富士川丸”

（映画タイタニックのロケで使われました）



沈船の中に眠る遺品

## チュークと日本

かつて、チュークは日本でした。

その当時は“トラック”と呼ばれていたのでもしかしたら年配の人であれば“トラック”と言えば分かる人がいるかもしれませんが、日本でしたと言ったときにどうしても戦時中の日本軍による侵略を連想してしまうかもしれませんが、チュークは日本が侵略して得た土地ではないので現地の人からのイメージは驚くほどいいです。美談として、二月の空襲の後、兵隊が飢えてばたばたと死んでいったときも、日本兵は一度も現地の人に銃を向けなかったといった話しも聞いたことがあるぐらい、日本の軍隊はしっかりとしていたようです。

「ここが日本だった時は、沢山日本人がいてね、彼らがいたときはよかったよ。彼らは私たちに働き方を教えてくれたし、何より一緒になって働いてくれたんだ。その当時はここには畑がいっぱいあったし、工場もあった。日本統治時代はよかったよ。」いろいろな人からこの半年ぐらいの間に同じようなことを何度も何度も聞かされました。さまざまな国の統治下を経験しているこの国ならではの発言ですが、他国の統治下であったときと“比較して”日本はずいぶんよかったです。



山の上にある大砲



島のあちこちにある巨大な防空壕



戦没者の慰霊碑

## チュークのインフラ

派遣されて驚いたことをあげると言われると真っ先にこの国のインフラ事情をあげることができます。例えば道ですが、今時世界のどこを探してもここチュークほどの凸凹道を見つけることは難しいのではないのでしょうか。島の端から端まで凸凹の道が続いており、雨が降るとそこがプールようになります。足首まで（場所によってはそれ以上になります）すっぽりとはまる水たまりの中を車も走るのでもまるで車がボートのようなようです。また日本でも計画停電という言葉は耳に新しいですが、この国の計画停電は日本の比較になりません。朝八時から十二時、昼四時から夜八時までの二回電気がついたら、その後は朝まで電気はありません。またそのたった八時間の電気さえも不安定で、場合によっては数日間電気がこないなんてこともあります。この国に来るまで私は月明かりがこんなに明るいということを知りませんでした。



川でも湖でもなく、道です



チュークの中秋の名月  
電気がない世界の月明かりは明るい

## 活動の様子

低学年（2，3年生）を対象に算数指導を中心にして時間がある時は日本の歌や文化の紹介をしています。赴任して最初にぶちあたった最大の難関は言葉の壁。この国の公用語は英語と聞いていたのに、低学年の子どもは現地語（チューク語）しか話せません。そのため、最初の三か月はまるで暗号のような現地語と格闘する日々が続きました。子どもの話しかけてくる言葉が理解できないことがこんなに辛いことだとは思っていませんでした。英語のように学ぶための教材や教具があるわけでもなく、最初はどのように学べばいいのかも分からなかったのですが、ホームステイ先の家族や現地の先生たちの丁寧な指導と、子どもたちの半ば強引な指導の甲斐あって今では生活や、授業をする上では特に困らなくなっています。

今現在は日本式の九九をチューク語に翻訳し、定着化させることに苦心しています。

南国特有のおおらかな風潮が強く、せつせと勉強をしようという雰囲気にはなかなかありませんが、それはこの国の良さでもあるのだと私は思っています。





子どもたち（教室にて）



子どもたち（校庭にて）

耳を澄ませばどこからともなく誰かの歌声が聞こえてきて、歌声に合わせて踊り出す人がいて、それを見てまた他の誰かがニコニコと笑っている。そんなチュークが私は大好きです。

2012/2/16 JICA 青年海外協力隊員 松永 広大